

世界に開く窓の一人として
（本誌は）

最近の中ソ関係

中嶋嶺雄
（東京外国語大学教授）
井上茂信
（サンケイ新聞説委員）

対談

井上 最近、東欧筋の情報として中ソの軍事対立激化の情報がしきりと伝えられております。たとえばイタリアの新聞『イル・グロボ』は三月二十四日、東欧筋の情報としてソ連の对中国予防戦争の準備がすでに進んだ段階に達していると報じました。同紙に続いてポーランドの日報『ジエニク・ロドワイ紙』は、二十五日、中ソ関係の現状がウスリー川で中国軍によるいわゆる挑発事件が起きた一九六九年のそれと非常に似ていると報じておりました。中ソの軍事緊張の高まりにつきましては、先にイギリスの軍事専門誌『アミー・クォーターリー・アンド・ディフェンス・ジャーナル誌』も、ことし夏にもソ連の对中国攻撃が加えられる可能性が強まると伝えました。

原因があると言われております。また現在中ソ両国は、ソ連のヘリコプターのいわゆる国境侵犯問題でもめております。この事件は中ソ国境近くの新疆维吾尔自治区で一台のソ連のヘリコプターが不時着した事件で、ソ連側は、同ヘリコプターは国境警備隊のもので、病気の兵士を乗せて後方の病院に緊急輸送中のものだったと言っておりますが、中国側はソ連の主張はまったくのデマで、同機には救助活動を行なう医療品も医薬品も全然発見されなかった。発見されたのは武器、弾薬と、偵察設備であり、機内の文献資料は乗務員がスパイ活動を行なっていたことを示すものだと断言しております。また三十一日の新華社電は、新疆のソ連によるスパイ活動が激化し、ソ連機の侵入がすでに六十一回に達していると言っております。

基本的にどのようにお考えでしょうか。中嶋 今、ご指摘のように最近頻々として中ソの軍事対立、ある意味ではソ連が中国に対して予防戦争を仕掛けるんじゃないかという情報がございますね。ご承知のように昨年すでにサモヒン文書が『デイリー・テレグラフ』から流され、わたくしも最近この原文を入手したんですが、こういう情報が非常に広がっている。一方、ご承知のように中国では最近の批林批孔運動の一環としてこれを対ソ批判、ソ連の侵入に備えよという動きがかなり強いわけでございまして、それからこういう一連の現象を見ますと、今日中ソ間は確かに軍事的にもひっばくしているというふうに考えざるを得ないですね。

わたたくし最近東南アジアを回ってきたわけですが、この中ソの軍事的緊張は、いわば長大な国境線を隔てて両者が対峙しているということだけではなくて、ソ連の最近の一連の海洋戦略、中国はこれをソ連の海洋覇権というふうに言っています、非常に激しく批判しているわけですが、いわば海洋面からも、とくにインド洋から南シナ海、台湾海峡を通じまして中国封じ込め体制が進んでいるというふうにも見られるわけですね。その点で確かに一連の情報というのは状況証拠としてはうなずけるものがあるわけですが、しかしながらこれがすぐ大規模な戦争になるというようなことは、やはり今日のソ連の世界戦略を考えても、中国自身がそういうことをすぐ望むか、あるいはなし得るかということも考えても、どうもそれはそこまで早急な結論を下すわけにはいかない。ただそういう緊張が非常に高まっているということですね。これが中ソ双方の国内政治なり、世界政策にどういうふうに影響してくるかということでは非常に多くの問題が含まれてるんじゃないかというふうに見ております。

井上 わたくしもだいたい同じような意見で、結論的に言いますと、中ソの武力衝突というのはたえずボンビリティとしては無視できないと思えますが、ことしの夏にでもすぐ起こる可能性がどの程度あるかというそのプロバビリティの点につきましてはまだ多くのクウェッションマークがあるんじゃないかというふうに考えてます。

そのボンビリティの点からお話ししますと、やはりソ連側においては軍部の間に前から予防戦争論というのがあったというところは事実ではないかと思えます。と言いますのは、これはアメリカの今度の国防教書を見ますと、中国の核戦略はしだいに強化されつつある。そして七〇年代末までに地下発射台に入った二十ないし三十発の大弾道弾を持つようになれば中国は第二撃の能力を強化し、戦略的に非常に強くなるだろうというふうなことを言っております。したがってソ連の軍部としては、現在のソ連の優位に立

っている軍事力をもってすれば中国のミサイル発射基地をつぶすことができるんじゃないかという議論も、セオリーとしては一応なり得ると思います。

しかしながら反面ポシビリティとしてすぐに予防戦争論が発動されるかどうかという点について疑問がありますのは、第一に中国はすでに所期の核戦力を持っている。これもアメリカ国防省の国防報告によりますと、中国の中距離弾道弾はすでに生産段階にはいっており、これらはソ連東部の重要目標を射程におさめているというふうに指摘しております。そうしますとこれらの中距離弾道弾は当然ウラジオストクからクラスノヤルスク、あるいはノボシビルスクに至る極東地域のソ連住民に対して向けられており、ソ連が現在シベリア開発に力を注いでいることを見ますと、中国に対するソ連の予防戦争というのはいへんな危険を持っているものである。また地上侵攻にしても、結局ソ連の中には、ソ連軍が中国国内に侵入することは、ちょうどナポレオンの大軍団がロシア大陸で大敗北を喫したと同じようにソ連軍もにつきもさつきもいかに状態になるんじゃないかというふうに……。それから外交的にも先生が指摘になりましたように現在の米ソ平和と二極軍事情況がソ連にとって平和の要になっている。

ところが中国と軍事的に事を構えようと、結局ソ連の軍事力が分散し、消耗す

る。そして一九五〇年代当時のように軍事的にソ連は対米劣勢下に置かれているというところから、やはり予防戦争論はセオリーとして軍事的観点からある対中国強硬論者のソ連の軍部の人が主張することは考えても、外交、その他世界戦略の点から現在のクレムリンの首脳部がすぐにこれに踏み切るというのはいへんな冒険じゃないかというふうにはあまりに思っています。

それで結局わたしはその点で先生にお聞きしたいのは、どうもソ連のほうでは中国内部の政治的動乱、とくに孔子批判に象徴される動乱が、結局対外的にたいそう強硬路線に中国が向くんじやないかということをお心配に思っているんです。この点、中国の孔子批判というのはどのような段階に達しているか、この点についてお聞きしたいんですが……

中嶋 その点は、最近孔子批判についていろいろなことが言われておりますが、非常に複雑な潮流が、とくに十全大会以降うごめいている。その中には明らかに現実主義路線に対する批判、周恩来批判と思われるような論調が『紅旗』や『人民日報』の中に見られるわけですね。しかしながらこれが文化大革命のときのように周恩来に批判的を絞って、周恩来系統のいわば脱文革グループを打倒する運動までいくかどうかという、現在の状況はそのようではないと、それだけに非常に複雑に外部から見ると

るとわかりにくいような潮流がうごめいていると思うんですね。ただこの場合にも林彪批判が対ソ批判に結びついていることはご承知のとおりでして、今の中国はできるだけこの問題を対ソ批判という形で問題を絞っていくことによって内政を固めようという傾向が見られるということですね。

先ほどの井上さんのご指摘で、わたしもご意見そのとおりだと思っております。二、三わたし感じを申し上げますと、大規模な中ソ戦争はないであろう。しかしながら国境をめぐる、あるいは今回の西沙群島の事件のように、これもすぐ中ソ対立と結びつけることはできないかもしれませんが、わたしはその背景にソ連の海洋戦略に対する中国の反発があったというふうに見るわけですが、こういう問題をめぐってかなり局部的な動乱、緊張、戦争というふうなものが起こる可能性はあるんじゃないかというふうに見るわけです。

かつて六九年の春に珍宝島の衝突があり、また新疆省の衝突がありましたね。これはたいへんなことになりそうだというときに、九月に、急拠ホー・チミンの死のあと周恩来がコスイギンを北京空港に招いて、中ソ衝突の危険をいわずに国境会談のほうに、外交ルートに乗せていって陳結したわけですね。このときは実はなぞがあったわけですが、最近そのなぞが解けてまいりました。というのは、あ

の当時コスイギンはすでにハノイからダシュケントに帰って、モスクワに帰る途中だった。それが急拠飛行機をスキャンペから北京に逆もどりして会議が開かれたんですが、この背景については最近アメリカでも若干資料が出てまいりまして、実はあのときにソ連側はアメリカに対して、中国をここで一挙にやっつけることを考えてるんだが、アメリカはその場合にどう出るかということをおいば打診したわけですね。

これに対してニクソンは、国家安全保障会議を緊急に招集して、非常に強い拒否の態度を示した。その後アメリカは米中接近のほうに行くわけですが、それでソ連は急拠その計画を放棄して、中ソ関係の打開に向かっていった。これが、コスイギンが途中から引き返したなぞではないかと言われるわけですね。そういうようなことを見ますと、中ソ間にはつねにそういう問題があるが、中ソ双方とも非常に今国際的な関連が強いございまして、そういう点でつねにアメリカの出方などを見なければいけないわけですから、これが大規模に発展するという可能性は非常に薄いだらうと。

ただ最近、オルソップですね、例の『ニューヨーク・タイムズ』のコラムニストなんかも、去年の終わりぐらには二五%ぐらいいその可能性を見ておりまして、『ニューズ・ウィーク』なんかでもヒフティ・ヒフティだというようにこと

をアメリカの高官は真剣に考えていると
いますから、われわれもそのへんのこと
を無視はできない。

井上 そうですね。わたしは今度の中
ソ軍事対立激化の情報が東欧筋から流さ
れている点にちよつと意味があると思っ
てます。というのは、モスクワでは最近
の孔子批判からんで中国の対ソ姿勢の
硬化を警戒して、モスクワが北京をけん
制するために意識的に流したんじゃない
か。つまりもし中国の対ソ姿勢がこれ以
上エスカレートして軍事的に事を起こす
ということになればそれに対して万全な
準備をしてるんだということを示すため
じゃないかというふうに考える。

といますのは、やはり孔子批判とい
う点については周恩来首相が一応巻き返
しが成功したかどうかわかりませんが、
急進派の、つまり左派の矛先をかわず唯
一の方法は、やはり対外政策の面で共通
分母を作りだす。その共通分母は何かと
いうと、第一の敵であるソ連に対する活
動、反林彪、反ソの線を貫くんだという
ことだと思っんです。したがってソ連側
としてはこの孔子批判のゆくえを見守り
ながら、万が一その共通分母、反ソの共
通分母を軸にして中国が国内統一、国内
の左派と現実派との妥協を図るような線
に出た場合には、これに対する万全な準
備をしなきゃならないというふうに考え
ている。それがその東欧筋から流された
一つの警戒警報じゃないかと思っんで

す。

その点に関連して、最近中国の対外姿
勢の硬化を示すものが幾つか出てきた。
西沙群島もそうなんですが、台湾解放に
ついて、どうも武力解放の可能性を肯
定するような発言が出てきたというふう
なことも考えられるんですが、その点ど
うですか。

中嶋 最近の台湾解放の問題とか、ア
ジア諸国の毛沢東型ゲリラに対する態度
なども微妙に揺れ動いており、一方では
非常に強硬なことを言うにもかかわら
ず、他方ではビルマのゲリラなんかに対
してサポートしないというようなことを
言ったり……。

ただ全般的に一時のような柔軟外交か
ら、かなり排外主義的な強硬路線への潮
流が、しかも周恩来自身も彼自らが批判
的になり得るだけにそれに非常に気を
使っていて強硬な言辞を弄するというよ
うなことですね。わたくしは台湾の問題
にしまして、本心は中国自身台湾の武
力解放が不可能だということは、承知の
上でそういうことを言わざるを得ないよ
うな内政上の背景があるんじゃないかと
いうふうに思っんです。

井上 そうですね。台湾の問題につき
ましては傳作義ですか、背共会議副主席
のことばとして、台湾解放をどのような
方式で行なうかは中国の内政問題であ
り、第三者に干渉の権利はない。台湾海
峽は今日では台湾解放の障害ではなくな

ったと、こう言ってるわけですね。それ
から第三世界の革命闘争に対する中国の
姿勢につきましては、先に中国を訪れた
タイの政府使節団に対して周恩来首相
は、ゲリラは支援しないと約束したと言
われておりましたが、三月二十四日にタ
ンザニアのニエレレ大統領一行の歓迎で
の周恩来の演説見ますと、中国は社会主
義国家であり、各国人民の革命闘争に同
情を寄せ、これを支持することは当然の
プロレタリア国際主義の義務であると。
人民の革命闘争支持なくして何で共産
党、社会主義国家と言えようかなと言
ってるわけですね。だから額面どおり見
ますと非常に変わったわけなんです、
実際問題として台湾解放については、こ
れは第七艦隊がいる以上、武力解放は現
实的には不可能だと思っますし、革命闘
争の問題につきましても現在中国は東南
アジアとの外交チャネルを復活させよう
と一生懸命になつてる。

にもかかわらずこういうような強硬路
線を打ち出したことは、そう言わざるを
得ない、つまり原則論の立場としてこう
いうことを言わないとその現実主義が修
正主義につながるというふうに受け取ら
れかねないというふうな国内の情勢、つ
まり左派の突き上げと、そういうふうな
お家の事情がしからしめたものであつ
て、それが額面どおり実施されるかどう
かというのは、これは今後の、むしろ中
国国内の今度の孔子批判に象徴される権

力闘争のゆくえを見なければならぬとい
うふうに考えていいと思っますね。
それからもう一つ、中国の対外姿勢は対
ソ関係のからみで、対米外交姿勢、ひ
いては対日外交姿勢に何らかの変化が予
想されるかどうかということなんです
が、この点はいかががございませう
か。

中嶋 わたくしは、ソ連が当面の中国
の第一の敵ですから、しかも米中接近と
いうのはいわば中国の現在の世界政治に
受ける国益からしても中国が望むところ
ですから、この大わくがくずれれることは
ないと思っますね。ただ日中関係はわた
くしは従来からの持論でして、米中関係
とは基本的に構造が違ふ。つまり米中双
方には歴史的にもいわばお互いにシンパ
シーを用いるような構造があるわけです
が、日中関係はいわば非常に宿命的な対
立というものを内にはらむような歴史的
関係がありますから、この場合に同じよ
うに論ずることはできないわけで、最近
の中国がチラツチラツと日本軍国主義批
判をやつたり、背風会を批判したりし
て、一時の友好ムードだけに甘えて、こ
れが日中関係を永遠に規定するものだ
というふうにわれわれが甘く考えている
ことを感ぜざるを得ないわけです。

当面中国も今、日本との関係非常にだ
いじなんです。つまり先ほどアジアの関
係出ましたが、日中国交回復が実現して

から一部のマスコミなどは、アジアと中国の関係がすぐ正常化されるであろうというふうに言いましたが、東南アジアの国々の中で、どこともまだ関係が開閉されていない。そういうことを考えますと、日本との関係は今、中国にとっても非常にだいいですから、やっぱり中国もその立場を守らざるを得ないし、それが中国の国益にもつながるところである。

井上 そうですね。わたしは中国の対日姿勢はもちろん、対米外交姿勢についても、やはり周恩来首相がうまく孔子批判をコントロールしておりつつあるとすれば、それほど大きな変化はないと思います。といえますのは、やはり周恩来首相は左派の米中接近についての批判をかむすためにうまく一つの逃げをうっているわけですね。といえますのは、これは十全大会でしたか、こういうふうなことはを……つまりソ連修正主義とアメリカ帝国主義の結託妥協と、それと革命的国家の帝国主義に対する必要な妥協とを区別しなきゃならないと。

つまり戦術的な妥協だということ点にも左派との共通分母を打ち出せる基盤があるんじゃないかと。

そこでわたしは対米接近についても、あるいは左派の突き上げがさらに激しくなり、左派との妥協が今後むずかしいとすれば、やはりある程度の限界が設定されてるんじゃないか。その限界につきましては文化交流の問題と、経済交流の問

題の二点から分けられると思うんですが、たとえば中国がオーエンラチモア教授を批判しましたね。こういう点も、わたしはオーエンラチモア教授というのは非常に中国のシンパサイザーな人だという、それを批判したという。反動学者であるという。

それからベートーベン、シュニベルト批判はもちろん論外として、文化交流につきましても資本主義社会とのイデオロギー闘争を忘れてはならないという線が打ち出されたのは、やはり左派の突き上げであり、周恩来首相としても対米接近が戦術的なものであるということ、わくを決めねばならない。また経済技術交流につきましても、これは『紅旗』でしたか、外国の技術、設備導入に頼って工業を発展させようとするのは早道だけど邪道である。そういうふうな自力更生を主張しておりますし、そうしますと敵の力を借りて敵を倒すという終局目標を設定して左派との妥協を図るとともに、イデオロギー、および経済交流についても原則的な点でやはり形の上では対米姿勢というのはいじやないかと思いませんか

次に、中ソの軍事緊張に話をもどしまして、ソ連にとって中国に対する予防戦争が戦略的に、外交的にまず不可能としますと、ソ連は長期的な対中国戦略をどのように立てようとしているか、この点については非常にむずかしいことなんです

が、いかがでしょう。

中嶋 やっぱり一つには毛沢東以後という問題ですね。これにはソ連も非常に気を使っているわけで、一時は周恩来に非常に期待をかけてたわけですが、最近はずしもそうではなく、毛沢東亡きあと中国の政治的不安定状況にいわば期待をつないでいる。もう一つは、先ほどわたくしも指摘しましたように、いわば非常にグローバルな中国封じ込め政策。

それから思いもよらぬ、従来は反共国家と言われたようなアジアの国々に対しても、最近のソ連の接触は非常にある意味でしつこく、ある意味では老かいと申しましようか、思わぬようなことがいろいろの情報としてあり、そういう意味でいわば中国封じ込め体制を外交的、戦略的にも作っていかうというのが当面のソ連の大きなねらいではないかと思いませんか。

井上 そうですね。わたしも同様で、モスクワの指導部は中国内部の孔子批判と、権力闘争のゆくえを当面注目しなければならぬ。それからもう一つは、中国が万が一軍事冒険に乗り出す。しかしその場合にただちに武力衝突、全面的戦争じゃなしに、たとえば対日戦におけるノモンハン事件のようなヒット・エントランでソ連軍の威力を示したというふうな形に出るんじゃないか。それから第三に、やはりポスト毛の状況を見て、そしてポスト毛の中国の政権が敵対的な

のでないことを望むといったふうな構えでいくと思うんですが、最後に、このような中ソ対立について日本はどのような外交姿勢を貫くべきかということですね……。

中嶋 ソ連の対日政策も、ある意味ではソ連のグローバルな対中国政策の一環だというふうな認識を持てば、やはり日本自身が主体的な判断で当面のシベリア開発にしても、日中経済協力の問題にしても、いろいろなことを予想した上で対処していく必要があるということ、最後を申し上げたいと思います。

井上 そうですね。どうもありがとうございました。

(四月一日放送より収録)

